

## 第 6, 17, 20, 22, 41 委員会の報告

広 瀬 秀 雄\*

今夏ハンブルクで開かれた I. A. U. 第 12 回総会は多数の会場で議事が平行して行なわれたため、少数の出席者で全部の議事に参加することは不可能であった。そこで出席者は適当に手わけをして出席したわけであるが、不十分はまぬがれなかった。各人は自分の属している委員会を中心に出席されたはずであり、私はこの考えにしたがい、また他の人達の行動を参考にして、6, 17, 20, 22, 41, の諸委員会に出席した。しかし、臨時に開かれる非公式集会にも重要なものがあり、出席者の人数不足をしみじみ感じた。次が出席した委員会での議事の概要である。

第 6 委員会 (天文電報) 電文コードの改正について私は提案していたのと、重要な中央局の提案に関して説明を聞くため、事前にコペンハーゲンを訪れ、天文電報中央局長テルノエの説明を聞いておいた。最も重要な問題はコペンハーゲン天文台は天文電報中央局を統括して維持して行くのが困難であるという訴えに対して、これをどう解決するかということであった。この問題には、世界各国の政治状況が反映するので、公平な仕事ができることを考えると、予算の多少だけで事が解決しない。COSPAR の利用している電信系統を利用する案も出たが、日本としては途中で米軍用ケーブルを含むため、以前経験した所をのべて賛成しなかった。このような論議は多くの国から述べられたので、電報問題は作業班で総会後検討することにして、回報発行だけはアメリカの Smithsonian 天体物理天文台に移されることになった。日本としては郵便に今までより日数がかかるという点で不満はあるが、印刷の迅速ということで幾分この不利は相殺されようという説明で満足せざるを得なかった。この問題については数回の非公式会合、会議の合間の立ち話などによって、しばしば意見交換が行なわれた。

第 17 委員会 (月の運動と形) 8 月 28 日、31 日の 2 回の会合があり、28 日が事務的協議会、31 日が研究発表会であった。事務的協議中の重要事項は委員会名を「月」と改め、その運動以外は何でも取り扱おうというものであった。月の運動は第 7 研究委員会 (天体力学) で引き受けてもらうという案であった。これに対し天体力学委員会はあまりよい顔をしなかったようであるが、とにかく委員会名改正の問題は閉会直前の総会で取り上げられ、確認された。

\* 東京天文台

第 20 委員会 (小惑星、彗星、衛星の位置と運動) 小惑星については主要な協議事項はその観測を盛んにすることであった。これに対し Brouwer 教授よりエル天文台の南天写真儀が参加してもよいとの意向が表明された。また当委員会よりの要望があれば、トリノ天文台も観測を再開したいというチェッキニ台長の意向が紹介された。また NASA のミニトラック観測所には機械調整のための焦点距離 100 cm, F/5 のカメラが遊んでいるから、これに参加を求める案も出た。何れも歓迎することになった。また観測の必要な小惑星について以前 Stracke 氏が実行していたように、特にその観測期の直前に観測者の注意をひくようにそのリストを発表する広瀬の提案もこの時採択された。

特に彗星の軌道研究の方面からの要望事項として、天体暦に載せられている毎年年初の分点による太陽の直交座標表は間違えやすいから削除されたいという註文があり、第 4 委員会 (天体暦) へ通告することになった。

ペオグラード天文台では観測要員の不足になやんでいること、写真乾板の入手が困難であることを訴え、その解決策について相談をもちかけてきた。この天文用乾板の問題については後に報告するような非公式集会が持たれた。

周期彗星軌道の計算については、2 人の人が独立して計算を進める方が望ましいこと、また卓上計算機による計算は現在でもまだ有用であるというようなことが確認された。

8 月 27 日の午前は小彗星に関する協議、同日の午後は主として彗星に関する協議に費やされ、31 日午前に研究に関する発表があった。ハリー彗星の 1910 年の出現の時の 33 コの規準位置に基いた計算では、近日点通過前と後と 2 種類の軌道が必要であることについて意見が交換されたが、中に太陽のわずかな扁率の影響ではなからうかという話も出た。

第 22 委員会 (流星、隕石) 委員長 Fedynsky が欠席したので、副委員長 Millman の司会で会議が進められた。また委員長の報告原稿が前もっての印刷に間にあわなかったのが、当日出席者に配布された。

議事に入って第 1 に微小流星体の問題は第 44 委員会 (地球外の天文観測) では取り扱わないとのことだから、当委員会の問題としたいとの案が採択された上で、次の諸研究問題に力を入れることが要望事項として採択され

た:

- 1) 月と地球に対する正三角秤動点付近で発見されたといわれている物質、雲の存在について検討すること。
- 2) 惑星空間塵について地球近くでの質量分布、速度分布の決定に力を入れること。
- 3) 隕石発見のため、各国がすでにカナダで見られるような適当な組織を作ること。
- 4) 新しく落下した隕石についてはモスカウの Dr. Krinow に報告すること。
- 5) Super-Schmidt による 100 コの流星につき、高さ、時間に対する絶対光度変化の観測データの発表。
- 6) 流星スペクトルの研究促進。
- 7) 流星塵の採取、特に隕石落下点または隕石坑付近での採取に努力すること。
- 8) 隕石坑の成立年代決定。
- 9) 大英博物館の隕石カタログの改訂。
- 10) 発見された隕石は短期同位元素研究のため、その研究のできる研究所へできる限り早く送ること。

以上の協議は8月26日午前、午後の2回にわたって行なわれ、9月1日午後には臨時に研究発表があった。流星の起源についての話がはずんだが、Millmanによると、流星のスペクトルより見ると、その大部分は彗星に起源を持ち、小惑星起源と考えられるものは9%以下という。

第41委員会(天文学史) 藪内委員よりの依頼もあり、時間の繰り合わせも割合うまくついたので、8月26日、28日の2回出席した。新役員として次の3年間の委員長は、E. Rybkaで、副委員長は Sticker にきまった。

ここでの協議事項の主要なものは Information Circular と Bibliography の出版の継続で、その責に当るポーランド科学学士院、ソ連科学学士院よりそれぞれ承知の意志表示があったことが報告された。また昔の天文機械の重要性に鑑み、その保存をはかるため適当な手段を構じる件は閉会直前の総会の決議となって承認された。

研究発表会においては Gingerich の古代の月の出入表の計算、楔形文字文書の年代決定のためエンケ彗星に関

する計算を進めている話などが注目をひいた。

#### 付録 I 高速写真乾板入手に関する非公式集会

天文用高速乾板の入手については世界各国困っているところが多い現状により、この集会が開かれ、Dr. Stoy と Dr. Evans (何れもケープ天文台) とがそれぞれ幹事、書記に推されて議事を進めた。結局世界各国で生産されている写真乾板の調査、入手条件等を作業班が調査し、その入手について努力することを要望して閉会となった。この集会には150名以上もの出席者があり、座席がないほどであったが、このことは世界各国がこの問題になやんでいることを示しているわけである。ドイツでは Agfa-Perutz 社で作っている乾板を使っているが、他国での入手は困難という。

#### 付録 II カール・シュワルツシルト天文台見学旅行への参加

総会終了直後の9月4日、5日の2日にわたり、東独エナ市近郊のタウテンブルクにあるカール・シュワルツシルト天文台(いわゆるタウテンブルク天文台)見学旅行が I. A. U. 地域組織委員会で計画されていたので、これに参加した。ここは 125 cm/200 cm の東独ツァイス製の世界第二のシュミット・カメラがある。この望遠鏡はナスミス焦点、クーデ焦点で分光観測ができるようになっていたので、万能望遠鏡と呼ばれているが、クーデ分光器は 1967 年完成予定という。現在はシュミット・カメラとして大きな渦状星雲の精細な写真測光、銀河極付近の特選区域での小宇宙の統計研究に使われている。所長は Dr. N. Richter である。

私はその他に南天星の観測に関する非公式集会、新天文常数作業班報告会等にも出席したが、これについては古在氏が別項で報告されるので、ここでは報告を省略する。

また今回は議事録、決議等の印刷配布がほとんど行なわれなかったので、会議の様子は直接出席する以外に知る事が困難であった。閉会に先立つ最終の総会において各委員会の委員長、副委員長、組織委員等の氏名も小字でスライド映写されただけであり、その記録に困った。

## I. A. U. 第 12 回総会

### 第 8, 19, 31 委員会の報告

虎 尾 正 久\*

第 31 委員会“時”では二つの大きな問題の討論で、3回の集会のほとんどを費やした。その一つは第 19 委

\* 東京天文台

員会“緯度変化”との合同問題であった。以前から Executive Committee でこの両委員会の合同が論ぜられ、第 19 は第 31 を吸収して“地球自転”と改称するとい